

 書評

北山 修 著

劇的な精神分析入門

内海 健

いつの頃からか、精神医学の言葉が乾いた音をたてはじめた。フラットな記述が横行し、症例報告といえは薬物やイベントへの反応で埋め尽くされるようになった。〈わかる—わからない〉をめぐる緊張感はどこにいったのだろうか。

青年期に私をとらえたわからないことへの憧れ、それをいまだに捨てきれぬ私は、いつのまにか他の領域に越境して学ぶようになった。その一つが哲学であり、折をみつけては一日中わけのわからぬ言葉のシャワーを浴びてくる。不思議に思われるかもしれないが、私の脳髄はそれで澱がとれてすっきりとする。

もう一つが、私にとって近くて遠い隣人、精神分析である。哲学とは対照的に、学会場に入るとそれだけで華やいだ気持ちになる。精神医学から大文字の語り部がほとんど退場してしまったが、ここではまだ固有名が健在である。そして自然と北山修のいる会場に足が向く。彼の心地よい語りに浸ると、私の脳髄はにわかには活気づくのだ。はじめのうち、その語り口をいくらかでも取り入れられぬものかと思ってはみたが、ほどなくあきらめた。北山は、私がまだ中学生の頃から、ステージで、そしてブラウン管の中で活躍していた。役者が違う。

本書は、精神分析という営みについて、舞台人でもある北山が、舞台と楽屋という設定を通して説き語ったものである。たとえば、現実という舞台で傷ついた者が、治療を求めにやってくる。分析家は彼に自分自身にもどる場、つまりは楽屋を提供する。しかし客はそう簡単に袂を脱がない。いつのまにか楽屋は舞台と化し、分析家も劇中に巻き込まれていく。まさに彼ならではの著作である。

標題のとおり、幕は「劇的」に開く。中学生であった著者は、保津川下りの舟の中で、手製の鉾石ラジオをいきなり父親に投げ捨てられる。そして読者

は 12 編の珠玉のエッセイの連なりに導かれる。

心地よく読み進めていたはずなのであるが、しばらくすると森の中に迷い込んだようになる。わかりやすいと思っていたのが、錯覚であることに気づく。第 IV 章「普通がわかること」にいたると、フェダーンの対象関係論をとおして、「脱錯覚」のための謎解きが一部開示される。フェダーンによると、対象とは興奮させる対象と拒絶する対象であり、双方ともに悪い対象である。良い対象はどこにも書かれ得ない。これが普通ということのあり方である。ここで読者は母親を発見することになるのだが、しかしそう一筋縄ではいかない。

さらに森の奥に分け入ると、一羽の鶴が現れる。著者の十八番『夕鶴』の「つう」である。与ひょうとつうは夫婦でありながら、母子の関係と読み替えられる。わが身を削って献身するつう、鶴は日本人にとって気高さの象徴である。だが自らの羽で機を織る姿をみることは禁止されている。この痛々しさとおぞましさに前に踏みとどまることは困難であり、物語は姿をみられたつうが去ることによって閉じられる。だが北山は、つうが楽屋の姿をみられてもそこにとどまり、与ひょうが成長する治療の展開を構想する。つうは彼の母であり、また治療者としての彼自身なのだろう。そして与ひょうは「物語以降」を生きなければならぬ私たち自身なのである。

評者はいまだこの著書を去ることができない。ラジオはいいかわらず行方不明のままである。中間、移行、あわいの中に留め置かれたまま、あたかも成長を見守られているように感じる。おそらく北山の臨床の極意はこのあたりにあるのだろう。再読してなお、この書は私の傍らにある。

(帝京大学医学部精神神経科学教室)

●四六判 304 頁 2007 定価 2,940 円(本体 2,800 円+税) みすず書房